

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770125

研究課題名(和文) フランス古典主義演劇の成立期におけるキリスト教悲劇

研究課題名(英文) The Sacred Theatre in Seventeenth-Century France

研究代表者

千川 哲生 (CHIKAWA, Tetsuo)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：50587251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、フランス演劇が確立、発展した時代である17世紀において、キリスト教の主題がどのような役割を果たしたのかを解明することである。同時期にフランスのイエズス会学校で創作され、上演されたラテン語による学校演劇を主要な題材として、レトリック教育の目的を演劇において達成するための技法、キリスト教世界観を反映させるための工夫を分析し、その結果に基づいて世俗演劇と比較を行い、両者の類似点、差異を明らかにすることを目指した。

研究成果の概要(英文)：The principal aim of this study is to analyze functions of the Christian subjects in the French theatre of the seventeenth-century. To make a comparison with the French classical tragedies, this study treats mainly with the Jesuit college theatre written by several teachers of rhetoric at the beginning of this century. In view of the rhetorical techniques and the Christian conception, I tried to demonstrate how the school theatre is influenced by Christianity and in this way it is different from the French contemporary tragedies.

研究分野：フランス文学

キーワード：演劇 フランス レトリック 悲劇 イエズス会

1. 研究開始当初の背景

ここ20年間のフランス17世紀演劇の研究は、ジョルジュ・フォレステイエ（パリ第4大学教授）を中心とする研究者の手で目覚ましい発展を遂げた。原典の確定や、創作と受容の実態に関する調査を通して、劇作に関する理論的考察と諸技法の総体、すなわちドラマトゥルギーを解明する、文献学的手法に基づく実証的な研究が主流となっている。ただしこのような研究は、演劇ジャンルの自立性の証明に大きく貢献した反面、詩や小説など他の文芸、当時の思想との関係を強調せずに、演劇を閉鎖的なジャンルとして位置づけようとしたことも否めない。近年この反省に立って、古典主義悲劇がヨーロッパ、フランスのさまざまな文化、文芸と交流し、影響を受けながら発展を遂げた過程を捉えなおそうとする動きが生まれてきた。具体的には、レトリックなどの諸学問とのつながりや、演劇論争や同時代のイエズス会の学校演劇との関連を、当時の文脈の中に位置づけて解明しようとする試みが行われている。

2. 研究の目的

以上の研究の動向を踏まえ、研究代表者の研究目的は、作家や作品をテーマごとに系譜立てて整理し、フランス17世紀の演劇史の全体像を再構成することである。ただしこうした遠大な目的を短期間の研究において達成することは難しい。そのため、本研究ではキリスト教（聖書、殉教伝）を主題とする演劇、とりわけレトリック教師によってラテン語で執筆され、学生の手によってコレージュ（中等教育機関）で上演されたラテン語演劇を主要なコーパスとして、宗教的制約と教育目的のなかで、演劇がどのように位置づけられていたのか、世俗演劇と教育演劇はどのような関連にあったのか、これらの問いに答えることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) フランスのイエズス会劇の多くは台本そのものが残されていない場合が多いが、デカルトも在学したことで知られるラ・フレーシュ学院において1610-20年代に執筆、上演された4名（ムーソン、ブトー、コーサン、セロ）のレトリック教師による作品がいずれも出版されている。本研究ではとりわけ、コーサン、セロ神父の劇作品を対象とする。また、フランス17世紀の世俗演劇で活躍したコルネイユ、ロトルーの悲劇作品も比較の観点から対象とする。

(2) 文献学的手法を採用し、ラテン語、フランス語の一次文献をフランス国立図書館やボルドー市立図書館、ラ・フレーシュ学院（現プリタネ陸軍学校）付設図書館において現地調査または複写申請することで入手する。

4. 研究成果

(1) 本研究ではまず、ニコラ・コーサン神父のレトリック論の観点から悲劇のドラマトゥルギーを研究した。コーサンはイエズス会士として、ラ・フレーシュ学院で教育に携わった経験をもとに、1619年に浩瀚なレトリック論をラテン語で発表し、その翌年にキリスト教悲劇5編を公刊している。そこで、かれのレトリック論における理論的考察が悲劇作品においてどのように生かされているのかを具体的に検討した。コーサンは、悲劇作品を通して観客に憐れみの情念を引き起こすために、擬人法、活写法をはじめとする描写の文彩を駆使することの有効性を訴えている。コーサンのレトリック論をつぶさに検討してみると、視覚の説得力、視覚の聴覚に対する優位性を無条件に賛美しているわけではなく、その限界や危険までも同時に認めていたことが明らかとなった。対抗宗教改革以降のカトリック教会の伝統的立場に立脚して、コーサンは視覚を最上位の感覚とみなしている。しかしその視覚の正確さゆえに小道具や舞台装置は演劇の幻想を強めるどころか、演劇の虚構性を暴く事物として、その成立基盤を揺るがすことになる。そのため、コーサンが悲劇作品において、言葉によって聞き手の想像力を介してイメージを生み出す活写法などの技法を特権的に重視するに至ったことを、詳細な作品分析とともに論じた。

視覚的イメージを創出するこれらの技法は、神が作者として創造したこの世界において、人間は観客である神の見守るなかで役柄を演じるとする、キリスト教の観点から解釈された演劇的な世界観（「世界劇場」）と関連している。この世界観に基づく描写的技法が、5編のラテン語悲劇において活用されている様子を作品分析を通して明らかにした。異教徒に迫害される登場人物たちは、自分の言動が神に見守られているという認識、神から与えられた役割をこの世界で演じるという覚悟を再三口にする。そこで、活写法をはじめとする描写のレトリック技法は、見えない世界と見える世界を橋渡しする役割を担うことで、人間は神を見ることができないが、被造物を通して神を間接的に見ることができるという、イエズス会の唱えた二重写しの世界観を、舞台上で象徴的に体現する役割を担っていることを示した。さらに、たとえ表象が目に見えるものであるとしても本質は見えないという、イメージに関するトリエント公会議での決議は、コーサンの演劇を本質的に規定しているという仮説を提示した。演劇は、舞台上で再現され、見えているものは実は空疎な影であり、本質的なものは見えないという盲目的な人間の状態を再現する装置として捉えられていること、この点にイエズス会演劇の教育的な役割があることを論じた。

(2) 他方でコーサンの悲劇には、宮廷を舞台として、英雄をねたむ宮廷人が詭弁を弄し、讒訴することで陰謀を企むという基本的なプロットがある。こうした言葉の乱用は、誠実な心を言葉に反映させるというコーサンの掲げるレトリックの理念と矛盾している。この矛盾は、異教徒の雄弁の上位にキリスト教徒の雄弁を位置づけ、その意義と有効性を唱えたコーサンのレトリック論と関わっている。『ヘルメニギルドゥス』はコーサンの悲劇の中でも、散文で書かれ、「弁論の実践」と題された特異な作品であるが、殉教する主人公は、異端の登場人物たちが言辞を弄し、真実を隠すのに対し、単純な言葉で弁明することに努める。この対立の背景には、聖書で用いられる単純で素朴だが、真理と関わるレトリックと、異教徒の用いる華美であっても空疎なレトリックとの対立が横たわっていることを論じた。

(3) 17世紀フランスのラ・フレーシュ学院でレトリック教育の一部を形成していた演劇教育を調査した。コーサンは前任者とは異なり、演劇に批判的だった教父の伝統に従って、演劇を固有のジャンルではなくレトリックの一部門として位置づけることで正当化を図っていることが明らかとなった。さらに、生徒に発声と演技の実践練習としての教育的手段の効果だけでなく、感情過多となってしまう問題点についても論じている。この演劇に対する批判的態度は、コーサンの在籍当時はラ・フレーシュ学院において常設上演の場が建造されていなかったことと関係していると推測できるので、当時の上演状況に関する資料を調査した。加えて、イエズス会のレトリック教育と比較するために、在野の学者リシュスルスの文章作法、とりわけ作文練習と創作の関係について研究を行った。

(4) コーサンの後を受けてラ・フレーシュ学院に着任したルイ・セロの悲劇3篇および悲喜劇1篇を、コーサンの場合と同じく、キリスト教および「世界劇場」の観点から研究を行った。セロは4編の劇作品を手掛けたが、宗教的教主題に拘泥しない点でコーサンと異なっており、たとえば悲喜劇と題された『よみがえった者たち』はアプレイウス『黄金の驢馬』内の一挿話に取材している。『警告を受けたサポル』は宗教悲劇だが、取り違えによる滑稽な劇作術を駆使したプラウトゥスの喜劇『アンフィトルオ』の悲劇バージョンである。このように古典喜劇の要素を取り込んでいる点がセロのドラマトゥルギーの大きな特色である。この点について、フランス世俗演劇の代表的作家であるロトルーが悲劇『真説聖ジュネ』執筆において参照したセロ『殉教者聖アドリアヌス』との比較を行うことで、変装や取り違えといった喜劇的要素がセロにおいて重視されていることを明らかにした。さらに、セロは『警告を受け

たサポル』の締めくくりにおいて登場人物の口を借りて、たちまち別世界へと観客を連れ去ってしまう演劇の力を冗談混じりに誇示している。メタシアター的な言及は、当時のバロック演劇でもしばしば用いられた技法であり、演劇礼賛の機能を果たしている。にもかかわらず、セロは『弁論集』において演劇批判を展開している。これはセロが演劇を批判するキリスト教の伝統と演劇を活用するイエズス会教育との矛盾を自覚していたことを示しているが、その論拠と議論構成を分析すると、役者批判と演劇批判、さらには喜劇批判と悲劇批判が分けられていることが分かる。セロは道徳的な条件を課した上で、可能な演出と劇場の状態を模索して正当化する。このセロの態度は、イエズス会が演劇批判のスタンスを守りながら、コレージュでは生徒たちに上演を行わせるという詭弁的な取り組みを推進していく風潮に先鞭をつけたということができよう。役者批判は教父たちの伝統を踏襲したものだが、セロはそれにとどまらず、ドービニャック師の世俗演劇の改革案「フランス演劇の再建試案」と同様に、役者の破廉恥さを取り除いた、公序良俗に適った劇場のあり方についても述べており、演劇の実践と学校演劇との境界線を示すものとして注目に値することを指摘した。

(5) 17世紀フランス悲劇を代表するコルネイユの劇作術に関する研究を行った。1660年以降のコルネイユの劇作術の展開を解明することを目指した。まず、悲劇『アッティラ』におけるルイ14世の称賛演説とみなしうる長広舌について、劇世界の統一を破るこの脱線について、単に年金支給の必要性から国王へのおもねりとして取り入れられたのではなく、むしろ、コルネイユが掲げるに至った理想とする悲劇世界からは、礼賛されるような英雄的美徳の化身であるルイ14世という存在が排除されなければならないことを逆説的に示すために導入された可能性を論じた。また、同時代に執筆された二本の英雄喜劇について、コルネイユが理想とする悲劇と、当時のギャラントリー（恋愛作法）の流行とが相いれないために、代替案としてコルネイユ自身が創始したジャンルである、悲劇と喜劇の中間に位置する英雄喜劇が手掛けられた可能性を論じた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Tetsuo CHIKAWA, « L'Usage visionnaire de l'hypotypose dans les tragédies de Nicolas Caussin », (「ニコラ・コーサンの悲劇における活写法の視覚的用法」原文フランス語)

Folia Litteraria Romanica, no 11, 全 12 ページ
(掲載決定済み、査読あり) 2017 年

千川哲生「悲劇は国王を描くのか コルネイユ『アッティラ』におけるルイ 14 世の称賛演説」『仏語仏文学研究』第 49 号、75-90 ページ(査読あり) 2016 年

千川哲生「英雄喜劇の再発見 コルネイユ『ティットとベレニス』と『ピュルケリ』、『エイコス』第 18 号、2 - 15 ページ(査読あり) 2016 年

〔学会発表〕(計 1 件)

Tetsuo CHIKAWA, « Admirer sans imiter : la théorie théâtrale de Pierre Corneille et l'admiration pour les héros des tragédies » L'Admiration et l'Ancien Régime, colloque international, 2016 年 5 月 12 日 ~ 5 月 13 日、Université de Montréal (モントリオール・カナダ)

〔図書〕(計 2 件)

千川哲生他「模倣から創作へ フランス 17 世紀の修辞学教師リシュスルスによる剽窃の方法」(『無名な書き手のエクリチュール：東日本大震災・ヒロシマ・アウシュヴィッツ』中里まき子編、朝日出版社、全 126 ページ(115 - 123 ページ) 2015 年

千川哲生他「古代ローマの栄光と苦難 フランス古典主義悲劇における女性の死」(『トラウマと喪を語る文学』中里まき子編、朝日出版社、全 250 ページ(127 - 135 ページ) 2014 年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千川 哲生 (CHIKAWA, Tetsuo)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：50587251

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()